

書評

本書を読めば病院の組織と機能は一目瞭然

今中 雄一 編

〔評者〕 邊見 公雄

社団法人全国自治体病院協議会 会長

『「病院」の教科書—知っておきたい組織と機能』

『「病院」の教科書—知っておきたい組織と機能』が、今中雄一教授(京都大学医療経済学)の編集で出版された。「先を越された」という気持ちと、「やっとこの手の本が世に出たか」という感慨が入り混じった感がある。

実は、私も田舎の自治体病院長を22年務めている間、新しい事務局長や事務職員が本庁から異動してくるたびに種々の関連書籍や医療雑誌の特集号を渡し、新規採用者研修では医師とコメディカルに分けてオリエンテーションを行っていた。例年この時期は年度末の学会や退職者の送別会、関連教室の定年教授への挨拶などに走り回っているが、大切な仕事と思い、合間を縫って実施してきた。新任の方々が組織にスムーズに溶け込み即戦力になっていただけるように、オリエンテーションでは私の知る限りの知識と経験談などをできるだけ噛み砕いて話をしたが、力が入り過ぎて持ち時間を超過することも度々であった。

こうしたオリエンテーションを各分野の長やチーム医療担当者などが丸一日かけて行い、2日目には電子カルテのシステムを説明したり、市内の分院の診療所や連携施設をマイクロバスで回るなど、医療の現場に早期になじめるように努めてきたつもりである。それでも五月病的な症状が現れる方もあり、本庁から初めて病院に転任してきた方が早々に異動願いを出したこともあった。病院は役所とはまったく異なった文化の組織であり、専門職が使う用語は外国語と同じ、さらには自分より若いドクターやナースに命令されるのは耐えられない、と感じられることもあるようである。詳しい説明を省き結論だけを述べる若い医療職もいるが、患者さんのことを思い一刻も早く用件を伝えようとした結果であり、決して命令しているつもりも悪気もないのだが……。

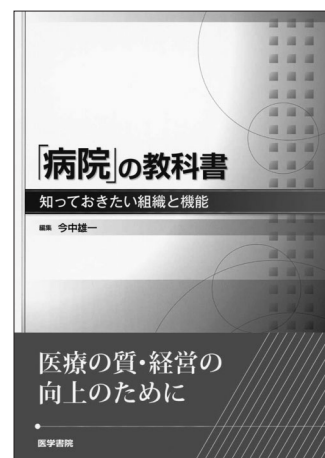
このように、病院は医療になじみのない者には異質の世界のように思われるが、本書を読めば病院の組織と機能は一目瞭然である。医療制度や関連法規、DPCなど新しい診療報酬制度や医療安全、最近よく話題になる院内感染などの感染制御、守秘義務やインフォームドコンセントなどの情報対策を含む危機管理についてもわかりやすくまとめられている。様々な専門職のために部門ごとに要求される知識も記載されている。

また、医療経営のビジョンの策定やPDCAサイクルを使った戦略の見直しや改善、人材の確保と育成など、病院の経営に携わる方に必須の知識がほぼ全般にわたって盛り込まれている。

さらには、今後ますます重要となる医療の質の向上にもふれ、少ないマンパワーを有効に活用するための地域医療連携についても前方連携・後方連携の有用性、今後さらに拡大する介護保険施設との連携も漏らすことなく盛り込まれている。編者の持論である「医療の見える化(可視化)」を地で行くように、図や表が多く使われているのも読者には親切である。新しく病院で働く新人や転入者はもちろん、すべての医療関係者に読んでいただきたい本であり、私が関係している診療報酬を決める中央社会保険医療協議会の1号支払い側や3号公益委員にも無料で私から差し上げようかとも思うほどである。

ここで宣伝を1つ。本書のコラム5「医療経営にかかわる人材育成の試み」(p11)で紹介されている日本医療経営機構(理事長:吉田修京都大学名誉教授)では医療経営人材育成プログラムを作成し、活動を始めている。今中先生が実務の中心であり、私も少しだけお手伝いをさせていただいている。興味のある方は、ぜひホームページを開いていただきたい。

最後に、本書の執筆者は新進気鋭の若手研究者ばかりであり、今後、この方々が日本の医療政策を動かす中心勢力になってほしいと願っている。また、この本が1人でも多くの人々の目に触れ、日本の医療が少しでもよい方向に向かうことを切に願うものである。「よい医療を効率的に地域住民とともに」を実現するには必読の書である。



B5 頁248 2010年

定価 3,990円(本体 3,800円+税5%)

ISBN978-4-260-00595-1 医学書院刊